

# 社会教育は生涯の学習テーマ 生涯学習は社会の教育テーマ

黒田 武彦（兵庫県立大学、兵庫県立西はりま天文台公園）

## How to Advance to Social Education and Lifelong Learning

Takehiko Kuroda (University of Hyogo and Nishi-Harima Astron. Obs.)

### Abstract

It is important that the people have the opportunity of lifelong learning. Social education is bearing many of lifelong learning. The present status of the lifelong learning in Japan is reported and the desirable image of astronomy teaching is propose, briefly.

#### 1. はじめに

社会教育は、社会教育法第 2 条にあるように、学校の教育課程として行われる教育活動を除き、主として青少年及び成人に対して行われる組織的な教育活動である。第 3 条では、国及び地方公共団体は、社会教育の奨励に必要な施設の設置及び運営、集会の開催、資料の作成、頒布その他の方法により、すべての国民があらゆる機会、あらゆる場所を利用して、自ら実際生活に即する文化的教養を高めようような環境を醸成するよう努めなければならないとしている。

このような目的を有している社会教育であるが、最近「生涯学習」という言葉と混同して使われる場合が多い。しかし生涯学習はどこにも定義されていないが、人々が生涯に行うあらゆる学習、つまり学校教育、社会教育、家庭教育、文化活動、スポーツ活動、リクレーション活動、ボランティア活動などであり、社会教育は生涯学習の一翼を担う。それは文部科学省生涯学習局の 28 項目にのぼる所掌事務からも見て取れる。

いずれにしても、人々が生涯のいつでも、自由に学習機会を選択して学ぶことができ、その成果が適切に評価される社会を目指そうとしているわが国にあって、社会教育の果たすべき役割はきわめて大きい。ところが、社会教育を取り巻く環境には厳しいものがある。国や地方自治体の社会教育費は年々減少していること、社会教育施設への指定管理者制度の導入などである。

本報告では、国民の意識調査の結果を見ながら、天文学に関する社会教育の在り方を提案してみたいと思う。

#### 2. 国民の意識調査をみる

##### (1) 生涯学習に対する意識

図 1 から図 11 に、内閣府総理大臣官房広報室が平成 11 年に行った「生涯学習に関する世論調査」の結果を示す。国の中枢機関が行った調査とはいえ、人々の生涯学習に対する傾向を読み取ることができそうだ。

その傾向は

1. 青少年は休日にほとんど社会教育施設を利用しない
2. 生涯学習の内容は圧倒的に「習い事」が多い
3. 生涯学習は役立っていると感じている人が多い

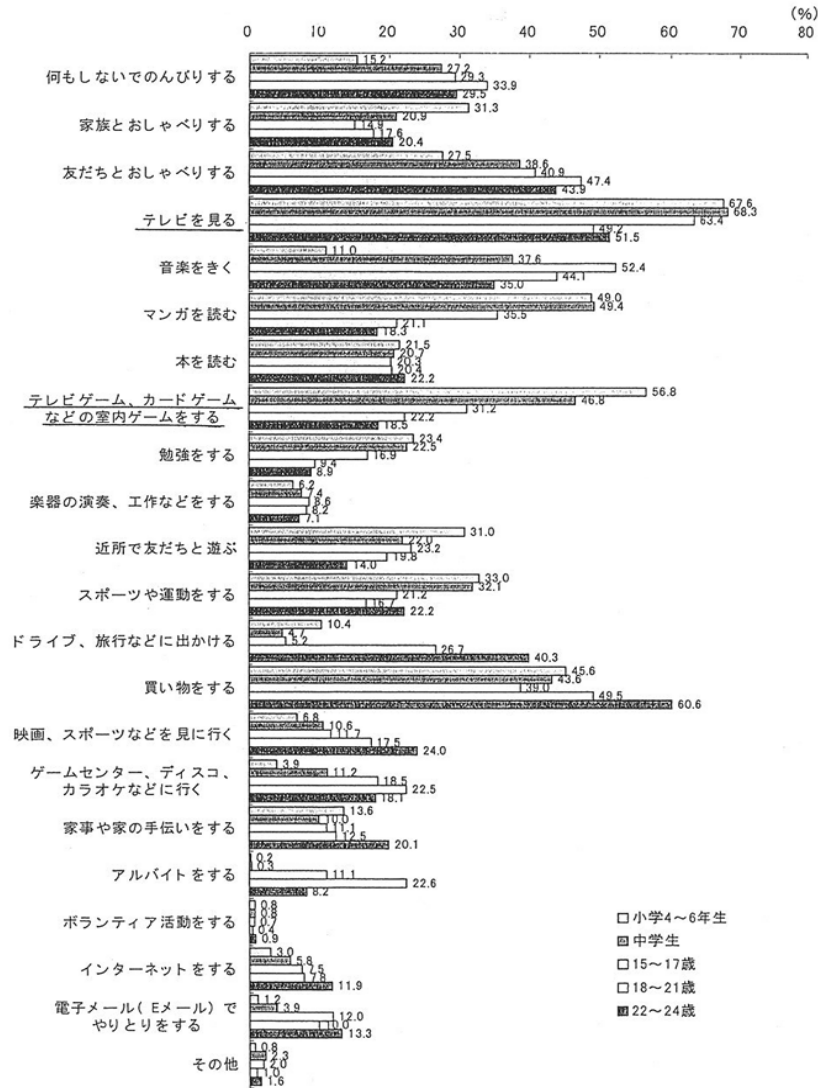


図1. 日本の青少年の休日の過ごし方

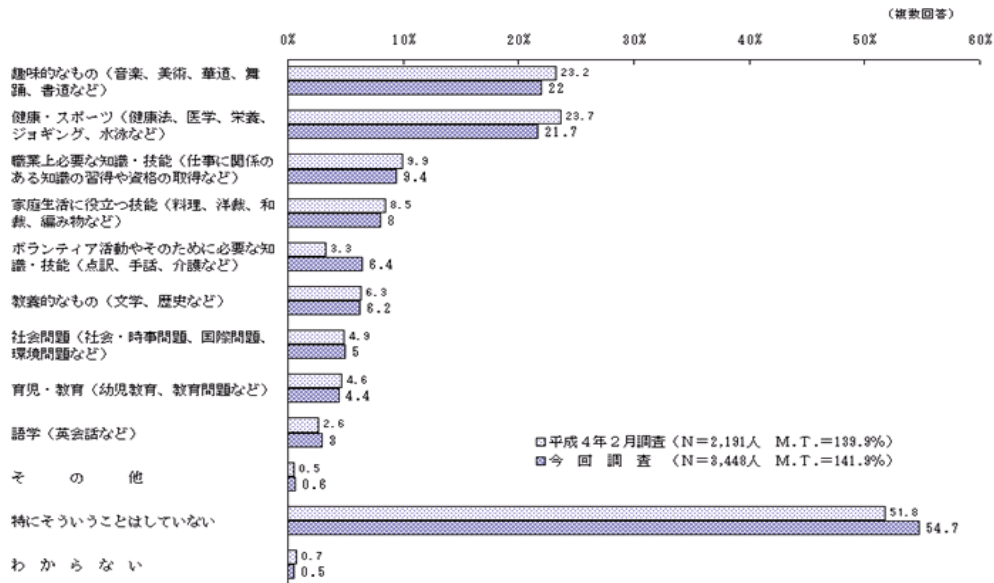


図2. この1年間どんな生涯学習をしたか

4. 生涯学習を困難にしている理由は仕事や家事の多忙
5. してみたい生涯学習も「習い事」やスポーツが多い
6. 生涯学習をしてみたい理由は、趣味、健康づくりが人気が高く、知識欲は多くはない
7. 生涯学習は公民館や民間への期待が大きい、大学や博物館への期待も少なくはない
8. 夜間、休日の利用、事業数の増、情報の提供が望まれている

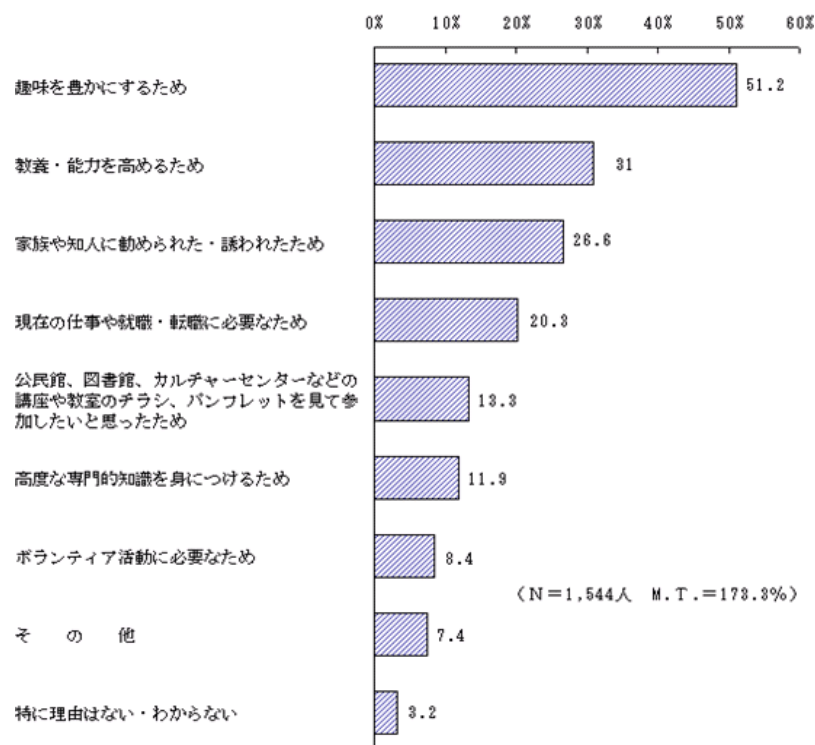


図3. 生涯学習のきっかけ

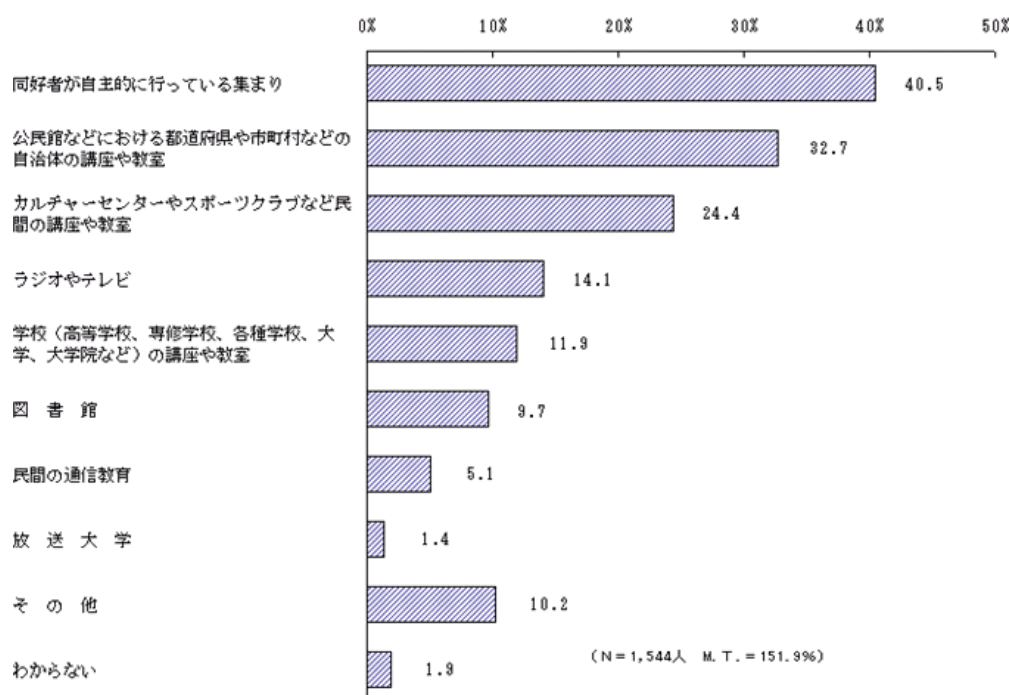


図4. 生涯学習活動の形態

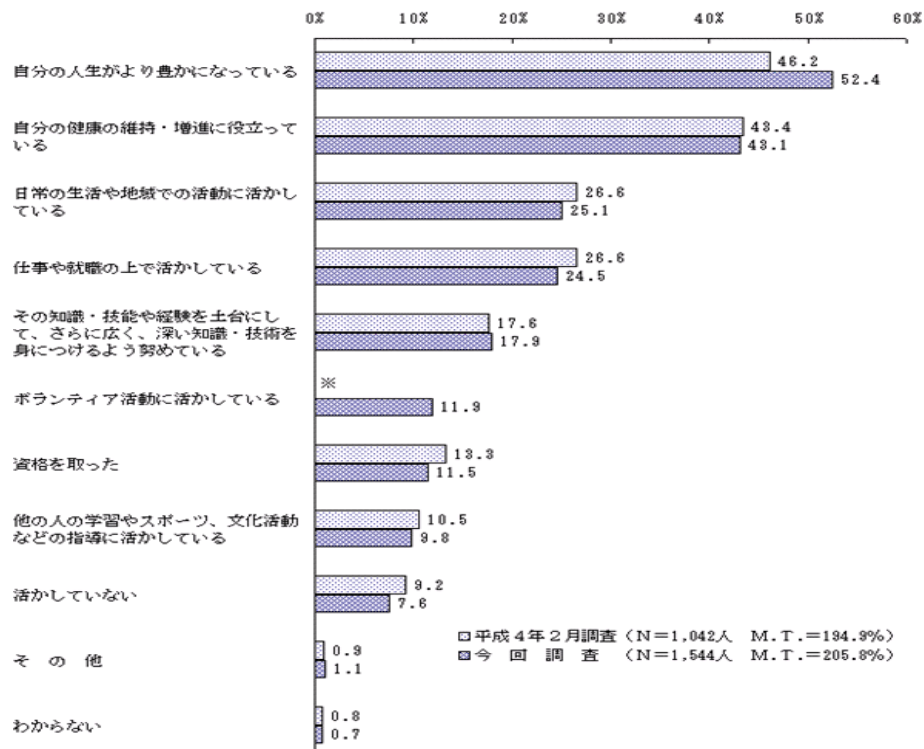


図5．生涯学習の成果の活用状況

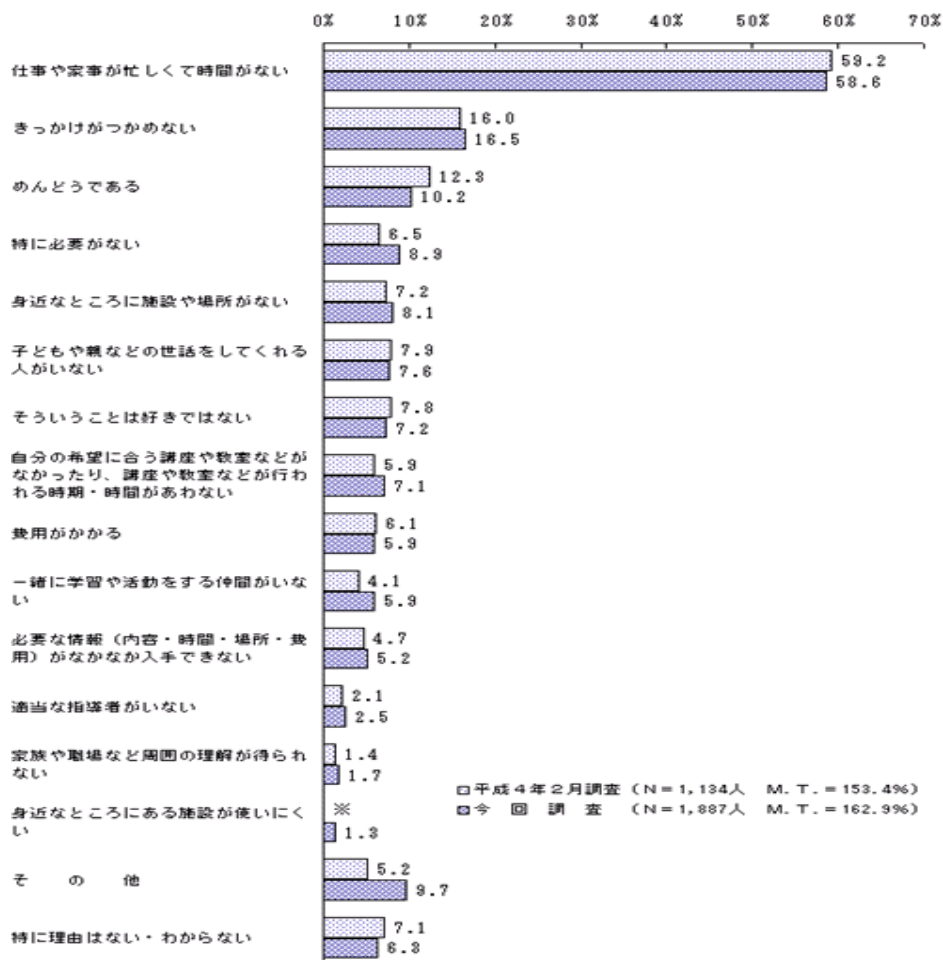


図6．生涯学習をしていない理由

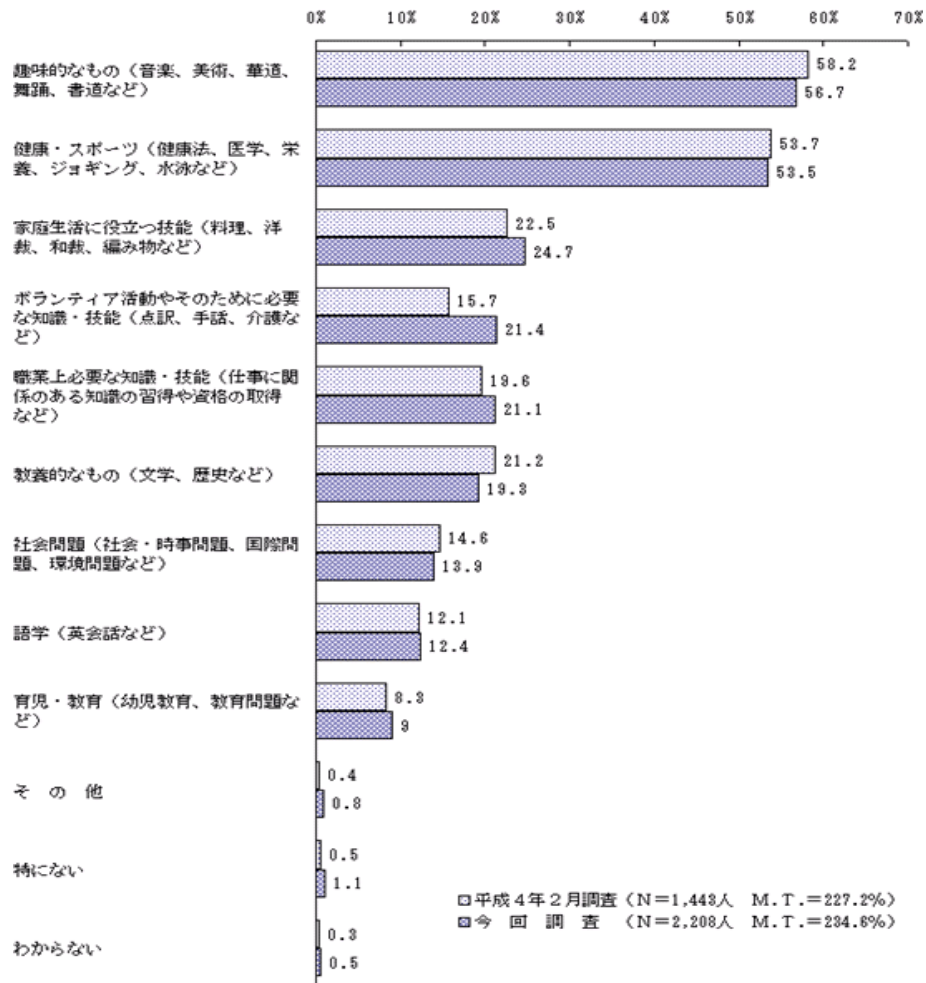


図7. してみたい生涯学習の内容

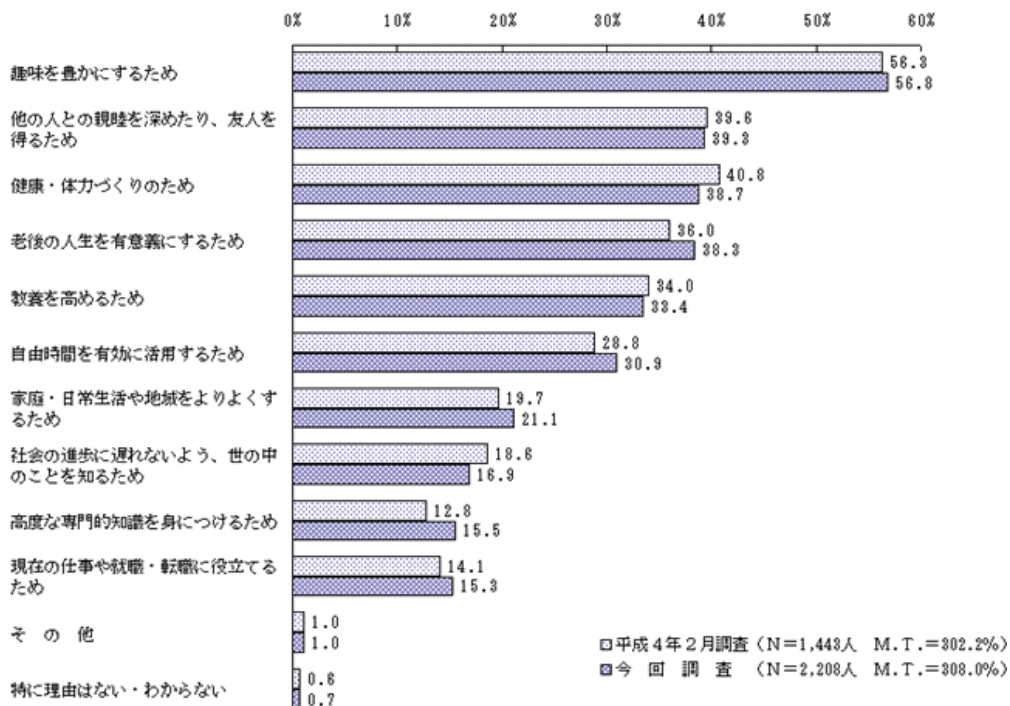


図8. 生涯学習をしてみたい理由

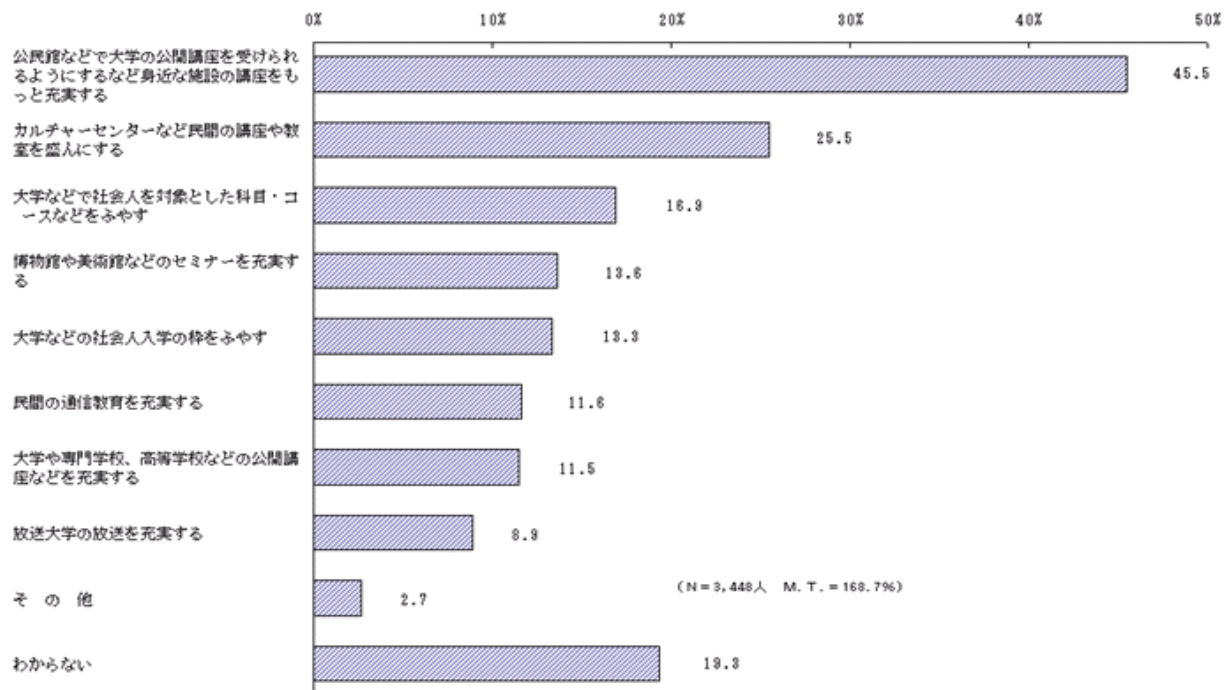


図9．生涯学習の機会について

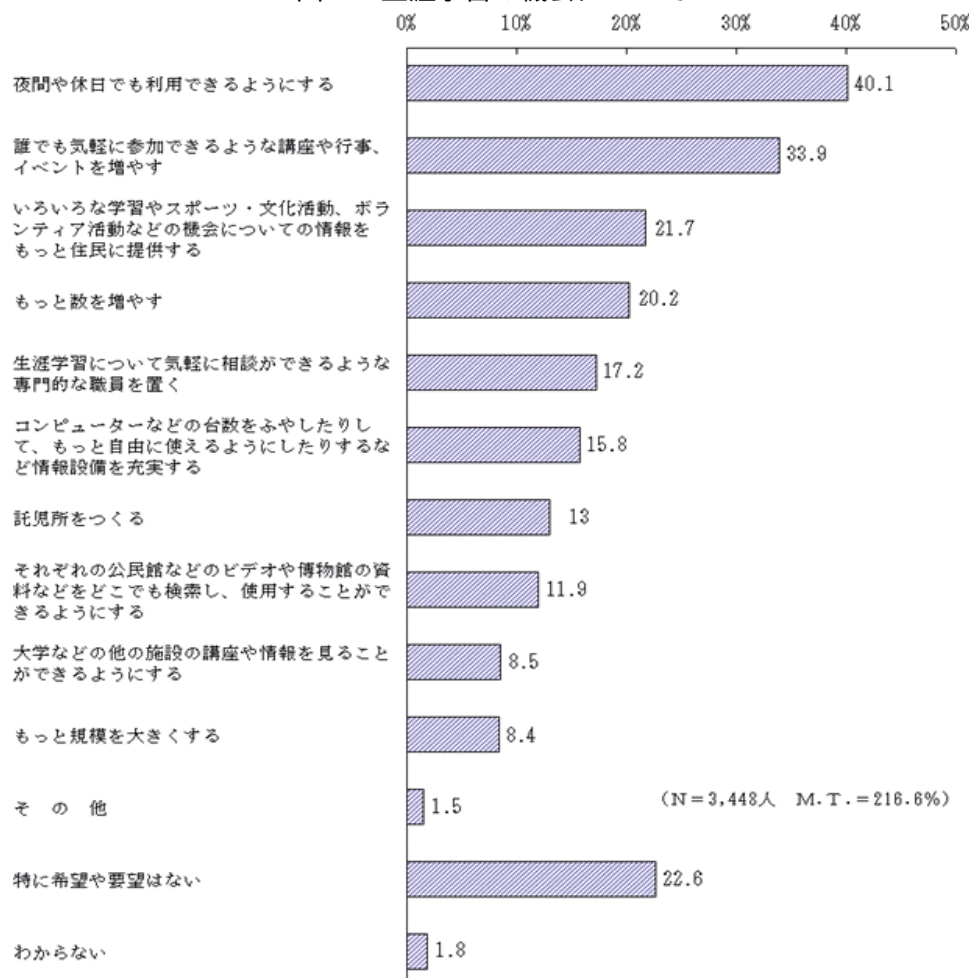


図10．生涯学習施設に対する要望

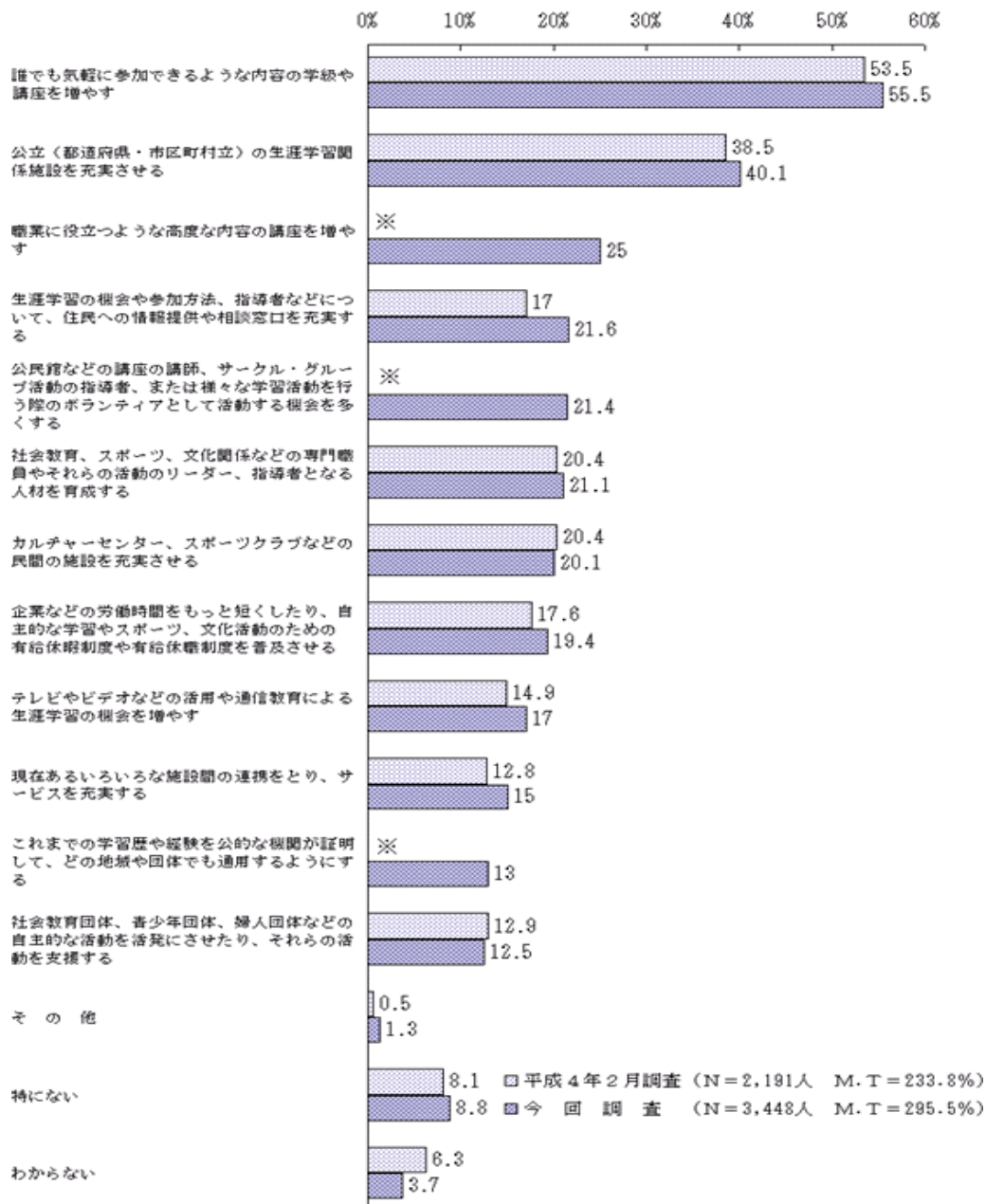
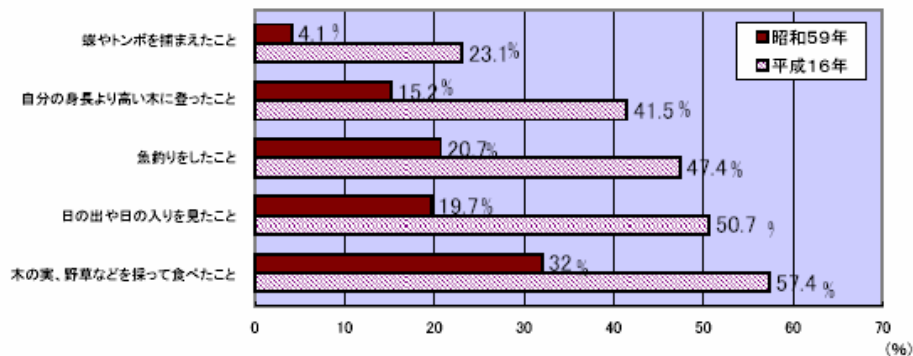
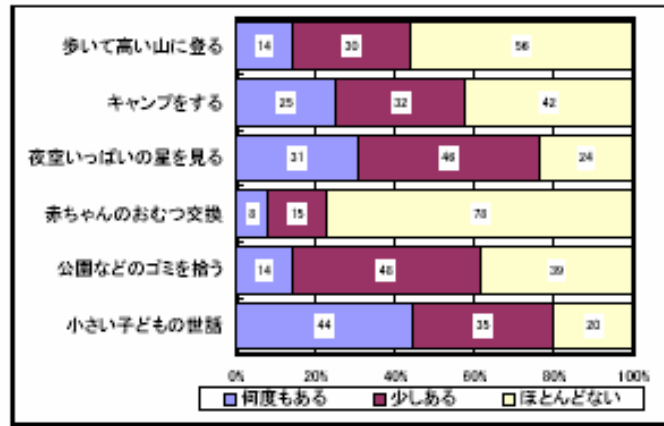


図 11. 生涯学習の振興方策



【出典】 「子供たちの自然体験・生活体験等に関する調査研究」 (青少年教育活動研究会)  
「子どもたちの体験活動等に関する調査研究」 (川村学園女子大学子ども調査研究チーム)

図 12. 子どもたちの自然体験 1回もしたことがない



「子どもの体験活動等に関するアンケート調査」より

図 13 . 子どもの体験活動

表 1 . 体験活動と学習意欲

		とてもやる気になる	やる気になる	やる気がなくなる	とてもやる気なくなる	その他
自然にふれる体験をしたとき	小学校	44.7	46.8	4.8	1.0	2.7
	中学校	22.7	50.5	11.7	0.9	14.2
	高等学校	13.2	49.7	9.4	2.9	24.9
地域の人々とふれあう体験をしたとき	小学校	30.1	56.8	6.5	1.3	5.4
	中学校	10.4	50.5	17.7	2.8	18.6
	高等学校	7.1	44.1	14.3	4.1	30.3

(資料) 平成 14 年 3 月調査, 学習意欲研究会 (国立教育政策研究所)

## (2) 子どもの体験活動の調査

図 12 は、青少年教育活動研究会等が発表した「子どもたちの自然体験・生活体験等に関する調査研究」のうち、子どもたちが 1 回もしたことのない自然体験を昭和 59 年と平成 16 年と比較したものである。天文の分野で言えば、日の出や日の入りを見たことのない子どもが昭和 59 年では 19.7%であったものが、平成 16 年には 50.7%と、この 20 年間に 31 ポイントも落ちていることは驚きである。半分以上の子どもたちが日の出や日の入りを見たことがないのである。

平成 7 年の結果は掲げていないが、図上の 5 種類の体験の上から順に、14.8%、27.6%、36.3%、43%、48.6%であり、子どもたちの自然体験が年々減少していることを物語る結果となっている。

図 13 は平成 10 年に文部省 (現文部科学省) が実施した「子どもの体験活動に関するアンケート調査」の結果である。歩いて高い山に登る、キャンプをする、といった子どもたちが少ない中で、夜空いっぱいの星を見る機会が何度もある子どもたちが 31%、少しある子どもたちが 46%と両方で 77%もある。上記の日の出、日の入りの体験の少なさ、キャンプをする、山に登るといった子どもたちが少ない現状で、どのような機会をとらえて夜空の星を見ているのか、やや気になるところではある。具体的な調査方法等は不明だが、プラネタリウムで満天の星を見たことがここに含まれていないことを祈るばかりである。



表1は平成14年に国立教育政策研究所が実施した「学習意欲に関する調査研究」のうち、子どもたちの体験学習が学習意欲とどう結びついているかを調査したものである。自然にふれる体験、地域の人々とふれあう体験の両者とも、それらの体験が学習意欲を大いに高めているという結果になっている。表だけからは読み取ることはできないが、体験をしたことをどのような形で学習に結びつけるかといった指導者側の働きかけが大きな要素になることは言うまでもない。机上だけの学習より、実際の体験を伴う学習が、その意欲も成果も向上することはこの調査を待たずとも自明ではある。学校教育においても、社会教育においても、限られた時間や予算の中で、いかに体験を多く採り入れるかに苦慮しているというのが実態であろう。

### 3. 天文の社会教育に生かす

社会教育を取り巻く環境の全体的な傾向を、2.の調査の結果も参考にしながらまとめてみると、次のようになりそうだ。

- ・ 金はない
- ・ 期待もそんなに大きくない
- ・ しかし何らかの形で生きがいを求めようとしている人は多い
- ・ 天文はおもしろいが、まだそれが理解されていない
- ・ 子どもには自然の本物体験が有効である
- ・ 専門的な人材が求められている

天文教育に特化すると、我々は天文教育の目的をしっかりと認識し、発信すべきであるという声をよく耳にする。重要なことは、ユネスコが提示した生涯学習の基本的な柱、知ることを学ぶこと、為すことを学ぶこと、他者とともに生きることを学ぶこと、人間として生きることを学ぶこと、を念頭に入れ、天文教育の成果をいかに地域社会の発展に生かすか、個人のキャリア開発に生かすかをも意識しながら、明確でかつ迫力のあるメッセージを発信し続けることであろうと思われる。

我々が最低限堅持すべき天文教育のビジョンを以下にまとめてみる。

天文学の成果は、物質の起源、生命の起源と深いつながりのあることを明らかにした

宇宙史は、比較的わかりやすいシナリオがあり、物語風に語れる唯一の自然科学

天文学は自然科学の総合であると共に、環境教育、平和教育にも結びつけることができる

天文教育の成果の生かし方として、従来の一方通行の知識伝授型から知識循環型への転換が求められている。その一例としてサイエンス・カフェ、サイエンス・パブ等、新たな知的交流の場を工夫する動きとともに、わが国では大きく立ち遅れている友の会の育成と活動の活性化が重要であろう。

なお、以上の内容の実現には、我々天文教育に携わる者が、常に自らの資質の向上を目指して切磋琢磨する必要がある。蛇足であるが「金がない」というのはどうしようもない現実ではあるが、身銭を切ってでもやろうという気構えは大切である。あらゆる機会をとらえて財源を取得する努力も必要である。国の科研費奨励研究をはじめ、民間の助成にもアタックしてみよう。財団法人助成財団センターでは、民間の研究費や教育費等、数多くの助成を紹介しているのでぜひ挑戦いただきたい ([www.jfc.or.jp](http://www.jfc.or.jp))。